

平成28年度第3回 川崎市総合教育会議 会議録

日 時：平成29年3月29日 木曜日 15時36分～16時52分

場 所：川崎市役所第3庁舎15階 第1・2会議室

出席者：

福田 紀彦 市長
渡邊 直美 教育長
吉崎 静夫 教育長職務代理者
濱谷 由美子 委員
前田 博明 委員
小原 良 委員
中村 香 委員

理事者

○総務企画局

加藤総務企画局長

○教育委員会事務局

西教育次長

芹澤担当理事[学校支援総合調整担当]・総合教育センター所長

小椋総務部長

小田嶋学校教育部長

古内総務部企画課長

渡辺学校教育部指導課長

佐藤学校教育部指導課担当課長[中原区・教育担当]

宮嶋総合教育センターカリキュラムセンター指導主事

鶴木総合教育センターカリキュラムセンター指導主事

永田総合教育センターカリキュラムセンター指導主事

事務局

北総務企画局都市政策部長

三田村総務企画局都市政策部企画調整課担当課長〔企画調整〕

山田総務企画局都市政策部企画調整課担当課長〔企画調整〕

山井総務企画局都市政策部企画調整課担当係長〔企画調整〕

高橋総務企画局都市政策部企画調整課担当係長〔企画調整〕

傍聴者数：5人

報道関係：1社

※ 読みやすさ等のため、発言の趣旨を損なわない範囲で、重複表現、言い回しなどを整理しています。

15時30分開会

北都市政策部長 それではお待たせをいたしました。平成28年度の第3回川崎市総合教育会議を開催させていただきます。

初めに、福田川崎市長から御挨拶をお願いいたします。

福田市長 改めまして、こんにちは。どうぞよろしくをお願いいたします。

今年度最後となる総合教育会議でありますけれども、本日は学力向上を主なテーマとして取り上げるとともに、今年度を振り返りながら1年間の総括をしてみたいと存じます。

学力をめぐるのは、昨年12月に中央教育審議会から次期学習指導要領の答申が出て、我が国の新しい教育の方向性が示されたところでもあります。学校教育において、社会で自立して生きていくために必要な資質、能力を育み、将来の川崎の担い手を育てていくために、本市として学力をどう捉え、どのようにその向上に取り組むかというのは最も重要な教育課題の一つであります。ぜひこういった点について、きょうも活発な御意見をいただきたいというふうに思っています。どうぞよろしくをお願いいたします。

北都市政策部長 ありがとうございます。

これからの進行でございますけれども、総合教育会議につきましては、地方公共団体の長であります市長が招集、主宰することとなっておりますので、福田市長よろしくをお願いいたします。

福田市長 それでは、次第に従いまして協議・調整をしてみたいと思います。

初めに、議題1の学力向上に向けた取り組みについてです。冒頭でも挨拶の中で申し上げましたけれども、昨年12月において、国において中央教育審議会の学習指導要領の答申の内容が公表されたところです。一方、本市においては来年度、かわさき教育プランの実施計画の改定を予定しております。平成29年度は本市にとって学校教育におけるこれまでの取り組みを振り返りながら今後の方向性を定めていく大事な時期になるということになります。こうしたことを踏まえて、本日は学力という非常に重要なテーマについて教育委員の皆さんと意見交換をしていきたいというふうに思います。

それでは、資料について、事務局からの説明をお願いいたします。

鶴木総合教育センターカリキュラムセンター指導主事 それでは、よろしくをお願いいたします。

本日のテーマは、次期学習指導要領を見据えた川崎の学力向上策でございます。

次期学習指導要領とこれまでの川崎の取り組み、そして子供たちの姿が明るく鮮やかに重なり合い、川崎の子供たちの未来への可能性が広がればと思っております。

新しい学習指導要領が平成30年度より、小・中学校で先行実施されます。学習指導要領は、これまでも社会を生きるために必要な力である「生きる力」の育成を掲げていましたが、今回の改定では、この「生きる力」を「社会を生きるために必要な資質・能力」という形で具体的に示し、その資質・能力を「何ができるようになるか」という視点で3つの柱に整理しています。「何を理解しているか」「何ができるか」「理解していること・できることをどう使うか」「どのように社会・世界と関わり、

よりよい人生を送るか」の3つです。

「何ができるようになるか」で示された資質・能力を育成するために、「何を学ぶか」で教科等の見直しを行っています。例えば小学校中学年から外国語活動が導入されることなどが上げられます。また、「どのように学ぶか」で「主体的・対話的で深い学び」の視点で授業を改善することを示しました。そして、これらの実現のためには、各学校において学校教育目標に向けて学校と社会が連携して取り組む「社会に開かれた教育課程」と教育の内容をよりよく配列する「カリキュラム・マネジメント」が必要であることを示しています。

今回改訂される学習指導要領には、この全体像を見渡せる「学びの地図」としての役割があり、子供の育成にかかわる全ての人々と幅広く共有することが求められています。

一方、川崎市では、社会が激しく変化する時代において、将来を見据え、「教育が人・社会の発展の礎を築く」という考えのもと、平成27年度より第2次川崎市教育振興基本計画である「かわさき教育プラン」を推進しております。基本理念を「夢や希望を抱いて生きがいのある人生を送るための礎を築く」、基本目標のキーワードを「自主・自立」「共生・協働」とし、子供たちに必要な資質・能力を育むための教育活動を展開しております。

ここで、川崎市で現在行われている学校での取り組みと地域と連携した取り組みの一部を紹介します。

まずは、学校における取り組みです。全ての子供に社会で自立して生きていくための基礎を育む「キャリア在り方生き方教育」です。今年度より全校実施となっております。キャリア在り方生き方教育では、これら「3つの視点」を通して、例えば自分に自信を持ち、自己を高め、お互いを尊重し、社会を積極的に形成していく力を身につけ、ふるさと川崎への愛着を深め、郷土への誇りを持つ姿勢等の育成を目指しております。

続いて、全ての児童生徒がわかることを目指す「習熟の程度に応じたきめ細やかな指導」です。各学校では、「授業がわかる」を実感できるように、手引編をもとに授業の内容や児童生徒の実態に応じて習熟の程度に応じた指導を取り入れることで、一人一人に寄り添い、基礎・基本の確実な定着を目指しております。

取り組みの状況も各学校ともに準備が進み、今年度は100%の実現に向けてさらに加速しております。こちらが小学校です。こちらが中学校です。

続いて、拡大要請訪問です。各学校からの要請を受け、各教科等の指導主事がチームで支援しております。研究推進校も公募によって決定し、授業実践を通して主体的に研究を推進しております。また、小中連携教育推進事業の中で学びの連続性を目指したカリキュラム開発等も行っております。お示した写真は、中学校の先生が小学校に赴き、チームティーチングを行っている様子です。そして、全教職員がいずれかの小・中学校教育研究会に主体的に参加し、研究を進めております。

次に、地域と連携した取り組みを御紹介します。川崎市は、これまでもコミュニティースクールや学校教育推進会議、地域の寺子屋などで地域と連携してまいりました。そして、子供たちや家庭、地域からアンケート等で学校評価を行い、さらに全国学力・学習状況調査結果をもとにした数値目標を設定し、改善に向け努力するなど、PDCAサイクルを意識しながら学校教育目標を実現するための取り組みを進めてまいりました。こちらのチャートは、各学校の報告書でお示ししている調査結果のモデルです。子供たちの実態に応じて各学校で項目等を工夫しております。

このように、川崎市ではかわさき教育プランに基づき、さまざまな取り組みを進めてまいりました。一方で、川崎の子供たちの現状はどのようになっているのでしょうか。平成27年度にスタートした

かわさき教育プランの取り組みの成果やこれからの課題を見ていくため、全国学力・学習状況調査や川崎市の学習状況調査の、主に平成26年度と平成28年度の数値を比較しながらお示しします。

今年度の全国学力・学習状況調査で川崎市と全国の数値を比較します。知識に関するA問題については、国語、算数・数学ともに小中とも全国の数値と同程度になっております。また、活用に関するB問題については、国語、算数・数学ともに小中とも全国の数値を上回っています。平成26と28年度を比較しましても、活用に関するB問題については、国語、算数・数学ともに小中とも全国の数値を上回り、好ましい状況にあります。これらから、B問題の正答率が全国よりも高い理由として、身につけた知識・技能を活用して課題を解決する学習等の取り組みの成果が考えられます。

次に、「自分にはよいところがあると思う」という質問について、平成26と28年度の数値を比較してみます。小学校では、平成26と28年度ともに全国平均を2ポイント以上上回っております。中学校では、平成26年度は全国平均を約2ポイント下回っていましたが、平成28年度は全国とほぼ同程度に上昇しております。

この質問について、同じ児童生徒がどのように変化しているかを見るために、昨年小学校5年生だった児童の1年後の変化について、川崎市と全国の調査を組み合わせ比較しました。また、同様に中学校2年生でも比較しました。昨年の小学校5年生が6年生になり、数値が高くなっていることがわかります。また、昨年の中学校2年生が3年生になり、数値が高くなっていることがわかります。

次に、今年度、川崎市の学習状況調査で初めて行った自尊意識とのクロス集計では、「自分にはよいところがある」という質問に「当てはまる」と答えている児童ほど、国語、算数の正答率が高くなっております。また、「自分にはよいところがある」という質問に「当てはまる」と答えている児童ほど、「将来の夢や目標を持っていますか」という問いに対しても「持っている」という回答率が高くなっております。これらの数値を見ますと、「自分にはよいところがある」の数値は小学校では全国を上回り、中学校は全国と同程度に上昇しており、同じ児童生徒で調査した結果も上昇しております。また、自尊意識の向上は学力の向上や生きがいに深くかかわっていることがわかります。これらは、キャリア在り方生き方教育等で自尊意識を高める取り組みの成果が徐々にあらわれているものと考えております。

続いて、川崎市学習状況調査の「各教科の好感度（好きだ）、理解度（わかる）、有用感（役立つ）」の調査結果を平成26と28年度で比較します。「好きだ」と「わかる」の数値は、小中ともに平成26年度より上昇していることがわかります。「有用感（役立つ）」の調査結果を平成26と28年度で比較しました。「役立つ」については、「好きだ」、「わかる」とは異なり、小中ともに平成26年度より平成28年度の数値が下がっていることがわかります。また、平成28年度の数値を教科ごとに並べかえますと、特に中学校では教科ごとの有用感にばらつきが見られます。

そして、こちらは「勉強をする一番の理由は何ですか」の問いに対する回答です。小中ともに「将来の仕事に役立つ」という回答が一番多いのですが、そのほかは小中での違いが見られます。これらの数値を見ますと、「好きだ」「わかる」は上昇し、「役立つ」には課題が見られます。この点については、各教科を学ぶ意義や学ぶ楽しさを実感することにつながる課題と考えております。

これらの結果を踏まえ、今後の取り組みとして、子供たちが「学ぶ意義」などを実感しながら学習に取り組めるようにしてまいります。そのために、授業をデザインする際には1単位時間だけで考えるのではなく単元や題材のまとまりで考え、学びの深まりをつくり出すために子供が考える場面や教員が教える場面をどのように組み立てるのかというような「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善に取り組む必要があると考えております。そして、「育成を目指す資質・能力」を明らか

にして、学校、家庭、地域が連携して子供を育てるよう、社会に開かれた教育課程の実現に努めてまいります。

子供の姿から見える成果と課題。成果をさらに伸ばしつつ、課題を解決していく取り組みを充実させていきたいと思えます。

以上で終わります。

福田市長 事務局から学力向上に向けた取り組みについて、国の動向、本市のこれまでの取り組みなどについての説明がございました。

また、本市の子供たちの現状について調査結果の報告がありました。これらのデータを見て、あるいは学校現場の視察等を通じて、まず川崎市の子供たちの現状について、教育委員の皆さんがどのような実感、印象を持たれているかということをお話を聞かせていただければと存じます。

どうぞ、どなたからでも結構でございます。

吉崎教育長職務代理者 先ほどのスライドもございましたが、まず全体的な状況ということになります。全国の中での川崎の子供たちの全国学力調査の結果でございますが、A問題という知識ですね、どれだけわかってるかということなんです、これは大体全国平均と同じぐらいということなんです。このように、川崎のように大きな都市になりますと大体こういう状況だと思いますが、まあまあ全国並みですね。もう一方、B問題の活用に関しては、全国よりも2ポイントや3ポイント高い。川崎市には小学生7万、中学校3万いますので、結構頑張ってるという感じがします。

ただ、見ていく中で、もう少しやっぱりA問題もきちっとプラスにしていくという方向をもう一度考えたほうがいいと思えます。B問題のように応用的な学力として知識・技能を活用するという点においては望ましい傾向なんです、これがよければ、いいというのではなくて、これをうんと上げていくためにはA問題の基礎的なものをやっぱりきちっと押さえるという。これはあくまでも平均正答率ではございますので、もう少しきちっと見てやっていく必要があるかなというように思えます。

あと、もう一つ感じたのは、学校いろいろ見てみますと、全国どこもそうなんです、川崎も若い先生が非常に多くなりまして、小学校を中心に。ここに来まして、新学習指導要領がアクティブラーニングという言葉はちょっと避けて、自主的で対話的で深い学びということに置きかえたんですが、対話的の意味が若い先生を中心になるということもあるんですが、ちょっと狭く捉えられてまして、グループで話し合いを中核にすればいいというふうに思ってる方が大分いるようでございまして、川崎も。私は、対話的というのは個人の中での対話という自主的な学びと、それからグループでの学びと、一斉の中でクラス全体での学びの中での対話と。対話といっても多様なので、もう少し根本を柔軟に捉えていただくようにしていただきたい。ここちょっと気をつけないと、何かグループで話し合いをすればいいんじゃないですかみたいな安易な流れにちょっと行きがちだという雰囲気を感じましたので、この辺のところをきちっと押さえていただかないと、A問題のもう少し上がるということはやらないのかなというふうに思っております。まず全体の感想です。

福田市長 ありがとうございます。貴重な意見をいただきました。

いかがでしょうか。

前田委員、お願いします。

前田委員 今、吉崎教育長職務代理者が言われたことに関連してですが、私もA問題がもう少しできていいのかなということ私なりに授業を見て感じました。なぜこうなってるのかなというと、やはり小学校で45分、中学校で50分の授業展開の中で導入、展開、終末とまとめのところがあるんですが、私が現役で教えてたところからの課題なんですけど、導入や展開についてはかなり工夫が見られてきています、研究の先ほど報告があったように。ただ、まとめの授業の振り返りの点でやはりずっと気になってるのは、チャイムが鳴っても結局振り返りの時間が不足して、非常におもしろい授業展開をなさるんですが、しっかりメタ認知というか、個人内の何を学んだかということ子供自身が振り返る時間が本当に、研究推進の発表の授業でも書かせる時間、指導案では5分とってあるのに1分でチャイムが鳴ってしまうとか、または振り返りの時間が教師が思った以上に短く、ある場合は振り返りに行かない展開でチャイムが鳴って終わってしまうと。そういうようなことの授業がまだかなり見られますので、やはり吉崎教育長職務代理者が指摘されたA問題の基礎・基本習得のところをしっかりと押さえていくためには、授業展開で振り返りのまとめの部分をしっかりと10分なりとれるような授業ができるようにしていかないと、B問題がせっかくできてるんですが、これをもっと伸びる可能性があると思うんですね。そういう意味で、基礎・基本のところをしっかりと子供に押さえるためにも、振り返りの時間がしっかりとれる授業構想、そういうことができるようになる必要があるんじゃないかなと感じています。以上です。

福田市長 ありがとうございます。

どうぞ。

濱谷委員 たくさんの学校があって、先生方が本当に苦勞されてるのは学校行くたびに思うんですけど、前田委員がおっしゃったように最後の時間までぎりぎりまで授業をされて、休み時間に入っても何かやっていらっしゃるようなのも見受けるんですけども、こういういろんなテストというのは、子供の正解するか間違えるかとかということももちろんなんですけど、それは先生の教え方がどうだったかということもテストしてるような気がちょっとするんですね。ですから、正解率が少なかったり、ここの部分が弱かったということは、教え方がどうだったんだろうという先生方が振り返るものでもあるかなというふうにも思ったりします。

全員が正解率がすごくよければいいということではなくて、しっかりとわかるというか、ただ答えがわかるんじゃなく、中身がしっかりとわからないと次の段階へ進めないということもたくさんあるので、特に算数・数学なんかの場合は、どこでつまづいてわからなくなっているかというのがちゃんとわかった上でそこを教えてあげないと、結局次々進んじまうとついていけなくなってしまうので、その辺が授業時間中も回りながら子供の書いてるのやなんか様子を見ていらっしゃるのもよく見受けるんですけども、その子その子でどこでつかえてるか、どこからわからなかったのかというのを見きわめてフォローしてあげないと、全体的なアップにはつながらないのかなということちょっと思います。

でも、本当に優秀な子はどんな授業であろうと、また自分で課題を見つけて楽しみながらきつと前進前進で進んでいくので、優秀な子もいっぱい育てなきゃいけないんですけど、全体的なレベルアップもどうやって図っていくかなというのを何か両方考えていかないと、川崎市の人材育成というか、いい子を育てる中では難しいなというふうにもちょっと思っています。

福田市長 ありがとうございます。

いかがでしょうか。中村委員。

中村委員 アクティブラーニングなんですけれども、まるで新しい言葉が入ってきたかのように思われてる方が多かったんですけれども、もともとデューイという教育学者が1930年代から『経験と教育』という中で、経験に基づく学習というものが大事だということを言っているんですね。でも、そのデューイが言っているところでは、やっぱり教育哲学が大事だ。それは何かというと、手法に走ってしまっただけいけないというところで、どちらかというと、先ほど先生方がおっしゃっていたように、「話し合えばいい」とかということになりがちだと思うんですね。まとめるということが大事だと思うんですけれども、そのまとめるときにも、教科で、時間で学んだことをまとめるということももちろん大事なんですけれども、もともと学校教育は何のためにある、この教科は自分にとって何のためにあるのかとかいうことを常に考えられるような教育をしていくことが大事だと思うんですね。今は生涯学習の時代と言われていまして、この時点だけでわかればいいという問題じゃなくて、生涯にわたって問いを立てたりとか学んでいくという力をつけていくことが必要なんであって、それは与えられたものを答えられるというだけではだめであって、自分で問いを立てたりとか自分で疑問を持って調べてみるというようなことがすごく大事なんであって、何というか、その授業だけのまとめではなくて、自分の人生の中での問いというものをつくれるような教育をしていくことがすごく大事なのかなという感じがしました。

福田市長 現状と、それからもう今既に方策のほうに皆さん踏み込んでいただいていると思うんですが、引き続きこのテーマで学力、課題に対する方策というふうなのがそれぞれの委員から出てきていると思うんですが、深める意味で何か感じておられることをありますか。

いわゆる今現状では、A問題というふうなのはもう少し上げられると。それは振り返りというふうな単元ごとのということもあるかもしれないけども、今中村委員言われたような、最初の時点なのかどうなのかわかりませんが、大きなゴールとか、目標とか目的を持ってということの中で設定していくということが大事だという、そういう振り返りと。短い意味での振り返りと長い意味での振り返りというのが、そうじゃないとなかなかA問題も向上しないし、ひいてはB問題にもつながってこないというふうなことなんでしょうかね。

教育長、よろしいですか。

渡邊教育長 今、委員さんのお話の中にいろいろございましたけれども、まずA問題が低いとは申しませんが、もう少し伸ばせないかというようなお話がございました。算数を例に申し上げますと、川崎の算数・数学の授業は、子供たちがまず課題に対してじっくりと考える時間を保障しよう、その姿勢はどの授業でも見られているかというふうに思っています。考えて、子供たちが考えたものを発表し合って、これを練り上げというような言葉を使っておりますけれども、より質を高めていこう、こういう学習スタイルがございまして、ある意味活用の部分で全国を上回っている結果が見られているのは、そういう授業スタイルが一般的になっている、そういう成果だろうというふうに思っております。

ただ、前田委員おっしゃったように、そのやり方をしておりますと問題、身につけたものを定着させる、習熟する時間というものなかなかとれなくて、考える時間は保障されているんだけど、

それを身につけるまでに高めるにはどうしたらいいか、それが常に私たちも現場でも課題として考えてきたところであります。

ただ一方で、先生がやり方を教えて、それを練習するというやり方をすれば確実にA問題の点数は伸びると思うんですけども、それを図ってしまえばむしろ本末転倒で、本来これから活用する力をしっかり伸ばしていかなければいけないという学力が求められている中で、Aは伸びたけれどもBは伸びない、逆に下回ってしまうということになりかねませんので、現在の学習スタイルを大事にしながらいかに定着を図っていくのか。その部分では、現在習熟の程度に応じた学習というものを入れているということでも全校進めているわけですが、そこをいかに効果的にやっていくのか、そこがこれから問われていくのかなというふうに思っております。

それから、濱谷委員からつまずきをもう少し先生が捉えながら指導したらというふうなお話がありましたけども、今、若い先生がふえているということで、ある意味つまずきを捉えながら生かしながら指導、授業をつくっていくというのは経験がある程度ないと難しい授業でもあるんですね。というのは、これも算数・数学で申し上げますと、問題を出したときに生徒がどのような反応をするだろうか、その予想がある程度できますと、じゃあこういう反応をした子にはどういう手だてを講じようかという授業プランはできるんですが、やはり経験がある程度ないと、一体この問題出したときに生徒はどんな反応するんだろう、そこが読めないとなかなか授業はつけれない。ですから、今、世代交代の中で教授法の伝承をいかに図っていくかというのが大きな課題になっていますけども、その辺ももしっかりやっていかなければいけないのかな、委員さんのお話伺ってそんなふう感じたところです。

それから、アクティブラーニングも、最初片仮名で入りましたよね。現場が活動を主体にすればいいのかという誤解があって、今は主体的・対話的で深い学びというふうに置きかわったので私はよかったと思っているんですけども、こここのところをいかに修正していくといいましょかね、本来狙っているものは何なのかというのをまたこれから現場にしっかりとお話をしていかなければいけない、こういうふうに考えているところでございます。以上です。

福田市長 ありがとうございます。

今の教育長の話を受けてでも結構なんですけど、前田委員や吉崎教育長職務代理者、いかがですか。

前田委員 特にこれからの取り組みについて、先ほど主体的・対話的で深い学び、今教育長さんからもありましたけれども、授業改善に取り組んでいくのには、やはり教師がこれから主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善のために必要な、やっぱり2つの視点があるように思うんですね。今まで発問とか板書とかいろいろな言葉、それから机間指導とか、先ほど話題になったグループ活動とか話し合いとか、そういうようなみんなが共通理解して使っているとされている言葉を一度ですね、例えば話し合いとは何か、話し合いとはどうすることか、こういう〇〇とは何か、〇〇とはどうすることかという2つの視点からもう一度職場で、研究会の中で、授業研究の中で問い直してみると、意外と違う理解をしている場合があるんじゃないかと思うんです。赤くて甘い果物は何ですかと言われたら、今の季節なら全員がイチゴを思い浮かべるかということ、そうではないと思うんですね。そういうことがあるので、やはりこれからの授業改善については2つの視点、〇〇とは何か、〇〇とはどうすることか、そういうことをもう一度問い直して授業改善に取り組む必要があるんじゃないかと考えています。以上です。

吉崎教育長職務代理者 続けていいですか。

福田市長 関連の話ですか。

吉崎教育長職務代理者 ええ、関連です。A問題のことなんですけども、世界においてはやっぱり日本の子供は学力は高いんですね。世界で見ると基礎学力は。トップ水準にあるというのはわかってるんですが、世界が日本の教育を見てるときに、一つは校内の先生方がお互い学び合う授業研究というのは非常にいいと。そのときに、それが世界でレッスン・スタディーで広がったときに、日本の教師の授業技術で一番注目されたのは、これ英語になってるんですけど、これは教材研究と板書なんですよ。板書はですね、これ見ますと、小学校の教室、すごい人はすごいんですね。1時間流れが終わったときにどういう課題があって、話し合いがあって、みんなでやったりしてどういうまとめになったかが全部わかるようになってるんですね。あれは全く我々みたいに大学の授業のやってる人間とは全然違う。何やってるかわからない・・・、これがすごいんですよ。この技術ってのはやっぱり伝承したほうがいいと思ってるんです。子供が振り返って見られるということが、さっきも前田委員も言いましたけど、最後のところできょうの授業って何だったのか、板書を見たときにわかって自分の学習を振り返るといことができるような技術をもった教師がやっぱり川崎かなりいらっしゃるんですね、すぐれた人、そういうのはどうやって伝えるかということが一つ。

もう一つはやっぱり教材研究ですね。これは渡邊教育長も言ったように、ただ教材研究やってるのではなくて、子供にとってのどうなのかという教材研究ですね。そういうところをやらないと、ただ教える内容だけ考えてるとちょっと違うので、だからその辺のところをきちっと子供にどんな予想、反応が出るかということはどうやるかということ学び合う機会が学校の中にあるといいですね。一応そういう感じがしました。

福田市長 ありがとうございます。

中村委員、お願いします。

中村委員 先生方のおっしゃるとおりだと思ひまして、どうやってそういう資質を、先輩の先生方から後輩の先生方に伝えていくかというところで2つあると思うんです。1つは、幼・小・中・高という縦のつながりを持たせた学びをされるといいと思うんですね。そうすれば、中学の先生にしてみれば小学校でこういうことを学んでいるんだとかいろんなことがわかっていきますから、中1ギャップとかいろんなものがなくなってくると、縦のつながりによって。それから教科横断的な学び合いということがすごく大事だと思うんです。私もいろいろな授業を拝見いたしましたら、とても子供たちの発話を引き出すことが上手な科目もあれば、どうもそうでもないかなという教科もありまして。教科ごとの研究会ももちろん大事なんですけれども、教科を横断するような研究会をぜひいただきたいくて、そういう組織学習を学校の中でやっていくということが大事なのかなというふうに思います。

福田市長 ありがとうございます。

小原委員。

小原委員 先ほどから皆さんのお話を聞いて、私ちょっと子供たちにかかわる機会が週に1回あるの

で、その辺で感じたところですけど、プリント一つとっても、子供たちがやってるのを見ている限りでは、採点をして答えが出たときに、間違ってる問題に対する振り返りが弱いんですね。何で間違っただのかというのを考えるのが少し弱く感じているかなという、そういう気持ちの問題だと思うんですけども。

それとあと、宿題なんかもそうですけども、宿題をどちらかといえばこなしてしまう傾向があるかなというのは見てて感じています。あとはもう一つあるのは、これはノートのとり方。ノートのとり方を見てると、もう少し上手なノートのとり方というのがあるのではないかなというところなどは見受けることはできるんですけども、それというのは場合によっては学校だけではなくて、家庭の中でどれだけ学校の考え方を理解した上で家庭の中でもやっていくことができるのかというものが少し弱くなってきているのかなというような気はしています。

福田市長 教育長、何か今のコメントを聞いて。

渡邊教育長 おっしゃるとおりだと思います。どこがわかっていないのか、なぜ間違えたのかというところを確実に振り返るといことが学力の先ほどからお話がありますような定着を図るという意味では大変重要だというふうに思っています。

宿題にしても、意味を持たせてやるということが大事であって、先生が家庭に持ち帰らせて何のために、何を学ばせたいから、何を定着させたいからこれを家庭でお願いしますというようなことがもう少し家庭にも理解されるような取り組みが確かに必要なかなというふうにも思っています。

ノートのとり方についても、今、教科書会社各社がいろいろとノートのとり方まで教科書の中に解説を入れるような状況にはありますけれども、自分の考えをまとめていくという意味ではノートのつくり方は大変大事だと思いますし、単に答えを出すためのノートではなくて、友達の考えも含めながら思考というものを大事にしていくようなノートづくり、そういうものをとても大事にしたいなというふうに思います。

それから、先ほど板書のお話がありましたけど、これも本当に大事だと思うんですが、今一つ危惧をしておりますのは、危惧と言うと怒られるかもしれませんが、50インチのディスプレイ、これを各教室に全て入れたんですよ。先生方はすごくこれを使うのは上手になりました。非常に効果的に使っているんですが、これに映し出したものというのはぱっと消えちゃうんですよ。学習の軌跡というものを残すという意味で、板書とこういうものといかに併用しながら効果的にするのか、このあたりも考えていかないと、これだけに頼ってしまってもまた逆に先ほどからおっしゃった板書のよさが消えてしまいますので、その辺これからも大事にしていきたい、こんなふうに思っております。以上です。

福田市長 それは何か課題のような気がしますね、吉崎教育長職務代理者。

吉崎教育長職務代理者 そうですね、ICT環境の。

福田市長 こういうものを使うことによっていい部分と、それと失われるかもしれないそういったものってありますよね。だから、うまく使うというのがとても大切なんじゃないかと思えますけど。

吉崎教育長職務代理者 やはりこれからは新しい教科として英語が入ってきます。それから道徳等ありますが、そういうことを考えますと、改めて小中連携の問題を考える必要があるかなと。英語教育も小学校と中学校どうつなぐのか。小学校でやったことを踏まえてないと中学校まずいと思いますので、その辺の合同の連携、研究会をやったらいいと思うんですね。道徳もそうだと思うんですよ。小学校でやった道徳が中学校、高校にどうつながっていくのか非常に大事です。

その点で、この前、百合丘小学校と西生田中学校が先月ですね、合同の国語研究会やりまして、西生田中学生徒が1クラスでしたけども、百合丘小学校に行きまして授業をやってまして、その隣6年生が授業を受けていました。中学1年生の授業と6年生の授業がどうなってるか。見ていただいて、合同で授業研究会やるのかなと思いましたけど、ほとんど参観ですね。小学校は小学校、中学校ちょっと分かれておりまして、あれをもう少しね、まぜてやるべきかな。中学校の授業を小学校の先生はどう見たのか。その結果、自分たちが育てた子ってこうなってんだよねとか、こういうところはまずかったねとか、逆に。中学校の先生が小学校行って、実は中学校のためには小学校でこういうふうには押さえといてもらわないと本当に困るんだよとかね、それは本音でね、議論しないといけない時期に来てるかなと。特に英語とか道徳が教科になりますので、だから既存の教科も含めて、改めて小中連携の合同研究会とか合同授業研究会とか、そういうものを企画する時期かなというふうに思いました。試みはだから非常によかったんですが、内容はもうちょっと物足りなかったんですね。そういう感想を先月感じました。

福田市長 ありがとうございます。これまでも小中連携の話って何度も出てきて、取り組んでいる取り組みもたくさんあるんです。いろんな課題も出てきてるといことなんでしょうね。

中村委員、何か小中連携みたいな話でありますか。特によろしいですか。

前田委員もよろしいですか。

前田委員 私は、中原中の道徳を濱谷委員と一緒に見たんですが、中村委員もですね、御一緒に。中学校1年と2年、3クラスずつで、3人だったので1組は私、2組、3組という形で、1年1組、2年1組を私見たんですが、そのときにすごい人数だったんです、参加者が。見たら括弧づきで小中合同道徳研修会ってなってまして、小学校の先生方が100名以上。ですから、百五、六十。もっと特別支援も入れますと百七、八十の先生がおられて、どこの教室も教室入れなくて、廊下から見るような形で見させていただいたんですね。今、吉崎教育長職務代理者が言われた、そういう意味では国語も一緒に私見ましたが、道徳のほうはまさにそういう吉崎教育長職務代理者が指摘されたような形では大変効果があったのではないかなというふうに思いました。

小学校の先生、中学校の道徳も1年1組は生命の尊重ということで、お母さんから生まれて、どういういきさつで、生まれたときの様子を事前アンケートで聞いて書いて、名前の由来、そういうものを教室に張ってあって、紙芝居でやる先生がいて、終末のところで同じ学年のやはり子育てをされた女性の先生が経験談を話されてと、そのような授業展開でした。大変小学校の先生にも同じような似た授業が小学校でも生命の尊重あるでしょうから、参考になったのではないかなというふうに感じました。

福田市長 ありがとうございます。

はい、お願いします。

渡邊教育長 小中連携などのお話がいただきましたので、少し補足的に説明させていただきますけども、平成の22、23年度ぐらいから各中学校区に連携教育推進協議会というものを設けて、小中の連携を高めましょうということで取り組んでまいりました。やはり最初は中1ギャップというような言葉が使われていたような時期でもありましたので、小学生が卒業後、中学校の生活に適應できるように十分図っていこうということでの取り組みが中心だったというふうに思います。

ただ、それだけではなくて、今お話あったような授業を通してお互いの学力向上につなげていこう、さらには世代間といいましょうか、小・中学生が交わることによって人間性も豊かにしていこう、そういうふうな構想がございました。なかなか授業をお互いに見合っって意見交換をする機会をつくろうと思っていたんですが、どうしても時間的な制約などがあって思うようにできていないというのが現状ではございます。ただ、その価値というものは十分承知もしておりますので、今後どんな工夫ができるのか取り組んでいかなければいけないというふうに思っております。

英語につきましては、今、南加瀬中学校区で中学校の先生が小学校に出向いて行って英語の指導を行うというようなことも行っております。そのために中学校側に非常勤の先生を入れまして、英語の先生が小学校に行って指導する時間がとれるように、つくれるようにやっているんですが、南加瀬中学校区は3小学校がありまして、初め1つの小学校で始めたんですが、ほかの小学校さんも大変いい取り組みなのでぜひやらせてほしいと。また、3校が集まってそういう協議などをするようなこともやってまして、これから英語が小学校で充実させなければいけないという課題がある中で、いい取り組みがございますので、こういったものを少し広げていければいいかなというふうに今考えているところです。

福田市長 このテーマで。はい、どうぞ。

濱谷委員 南加瀬のところのお話今伺って、すごくいいことだなというふうに。小学校で英語と言われても英語の勉強してきた先生がいらっしゃるわけじゃないので、中学校は英語の先生、数学の先生っていろいろいらっしゃるんだけど、小学校は全部教える中で英語も今度プラス教えなきゃいけない。それこそ今度道徳も入ってきたという感じでいっぱいいいかなというふうに思うので、とてもいい取り組みで、中学校から行って教えていただいて、その授業を見せていただきながらやり方を少しずつ小学校の先生が学んでいくという感じで、小学校に英語が浸透していけばいいなというふうにすごく思いました。

福田市長 ありがとうございます。

よろしいですか。

いろんなさまざまなA問題、B問題の問題から始まって、ただ教育長から先ほどありましたように、A問題を点数上げるということは比較的簡単なんだけど、それをやっちゃうということですよ。これまでよりB問題に重視してというか、そういう取り組みをやってきたんだけど、ただいろんな方法でもう少し振り返りだとか、今出されたような御意見をやっていけば、A問題も向上できるし、その展開としてBも上がっていくという、そういうふうなスパイラルにできるんじゃないかというふうなお話だったというふうに思います。こういった御意見をもとに、また教育委員会の取り組みを進めていただきたいなというふうに思っております。

この議題1についてはよろしいでしょうか。
ありがとうございます。

福田市長 次に、議題の2の総括についてであります。

本日は平成28年度最後の総合教育会議となりますので、教育大綱に基づく取り組みの状況を振り返りながら、各委員の皆さんから一言ずつ御感想や来年度に向けた課題など御発言をお願いしたいと思います。

まずは、資料について事務局からの説明をお願いします。

古内企画課長 かしこまりました。それでは、事務局のほうからA3横版、資料の2とあります川崎市教育大綱、平成28年度における基本政策の主な取り組み状況についてという資料をごらんをいただきたいと思います。

こちら資料は、教育大綱の基本政策と関連する事務事業を記載しております。中にあります星印のついた事業については、右肩にありますように、こちらかわさき教育プランにおいて重点事業に位置づけられてる事業でございます。順を追って御説明をさせていただきたいと思います。

まずは、基本政策の「1 人間としての在り方生き方の軸をつくる」では、先ほどの学力向上の際の説明にもありましたが、将来の社会的自立に必要な能力・態度を育てる、本市学校教育の柱となっておりますキャリア在り方生き方教育、平成28年度は全校実施となっております。

基本政策の2では、「学ぶ意欲を育て、「生きる力」を伸ばす」というテーマでございますが、きめ細やかな指導・学び研究推進校の指定による研究の推進とありますのは、これも先ほどの説明にもありましたが、習熟の程度に応じた指導の充実に係る事業でございます。また、中学校給食に関連いたしましたは、学校に給食室を設置して調理を行う自校調理方式での給食を開始するなど、取り組みの進展がございました。

基本政策の「3 一人ひとりの教育的ニーズに対応する」では、いじめ・不登校対策を初め、各学校におけるさまざまな教育的ニーズへの対応を図る児童支援コーディネーターの専任化の推進を記載しております。

基本政策の「4 良好な教育環境を整備する」の項目では、学校施設の老朽化対策と教育環境の向上を目的といたしまして、学校施設長期保全計画について記載しております。

基本政策5では、「学校の教育力を強化する」というテーマで、こちらは今年度ですね、県費負担教職員の市への事務移管、権限移譲等がございました。

また、基本政策の「6 家庭・地域の教育力を高める」では、地域の寺子屋事業がそれぞれ重点事業となっております。

続く基本政策の7では重点事業はございませんが、トピックスとして今年度、横浜市立図書館との相互利用に関する協定の締結などの取り組みがありました。

基本政策の「8 文化財の保護活用と魅力ある博物館づくり」のテーマでは、高津区、宮前区にまたがります橘樹官衙遺跡群の保存と活用に係る取り組み等がございます。

基本政策は8つなんですけど、それに付随いたしまして、最後に中学生死亡事件もこの大綱の中に盛り込んでおります。中学生死亡事件の再発防止と未然防止に向けた取り組みといたしましては、次年

度に子ども・若者ビジョン重点アクションプランにおける評価、検証を予定しているところでございます。

以上が今年度の重点事業を中心とした取り組みでございます。説明は以上でございます。

福田市長 ありがとうございます。

それでは、1年間の取り組みを振り返りつつ、委員の皆様から御発言をいただけますでしょうか。

はい、どうぞお願いします。

吉崎教育長職務代理者 我々教育委員内に教育プランについては委員会がありまして、そちらの評価が非常に高かったのは、本市独自の政策で非常にいいなというのはキャリア在り方生き方教育、それと寺子屋事業です。これの評価が非常に高かった。これは非常に私もそう思います。

あと、さらに言えば、給食が今年度で進んでいくわけですが、このことによって知育、徳育、体育の基盤としての食育も改めて考えるいい機会になりました。その導入で大分入ってきたようですので、この充実がさらに求められるかなど。食育のあり方ですね。特にこの場合も学校と家庭との連携、給食だけじゃなくて家庭との関係ですね、これをもう少し考えていくきっかけになるかなというふうに思います。

それから、児童支援コーディネーター、これも非常に本市独自だということ、全校にことし専任化が進むということと、中学校は生徒指導担当という形で2つの役割を持たせておりますけれど、この辺も人的支援としては非常によかったなと思います。

今後期待したいのは、一つはICT環境の整備ですね。それと図書館のあり方をもう少し、司書配置が進みましたけども、もう一度図書館、読書のまち、川崎ですので、このところをもう一度考え直す必要があるかなというふうに思います。以上です。

福田市長 ありがとうございます。

どなたからでも結構です。

濱谷委員、お願いします。

濱谷委員 昨年から中学校の給食が徐々に始まってきて、29年度は全体にスタートしていくわけですが、いいスタートは切れてるなというふうには思ってるんですけど、センターからの給食がスタートした時点で子供たちにしっかりと温かくておいしい給食が届く、それは確実にできるかなというふうには全国のセンターやなんかも見てて、センター給食もとても今進んでますので、おいしい、いい給食が届くのは確実にだと思うんです。先ほど吉崎先生がおっしゃったように、食育の部分もやはり少し進めていかなければいけないなというふうに思います。

一番中学生の体が、人間として生きていく上で中学生のときの体づくりが本当に大人になる大事な時期ですので、その辺を踏まえた上で、子供に直接、もちろん自分の体を育てるために、大人になるために今大事だよということをわからせるとともに、親御さんたちにもわかってほしいなというのをとても思っています。ですから、教室で先生と一緒にしっかりみんなで同じものを食べてお話ができたり、それは本当にいいことだなというふうに、それぞれが違うお弁当を食べてるのではなくて全員同じものを分け合って食べてる部分がね、いいことだなって。幾つかスタートした中学校を見に行っても、必ず先生と一緒に食べて、楽しそうに子供たちもしゃべってましたので、そういうふうにつき

と小学校でもやってきてることですので、きっちりいくなというふうには思っています。

なるべく食育という授業といいですか、時間を全ての子供たちにとれるようになるというのを、たくさん何時間もじゃなくていいと思うんですけども、1年生のときにはこれを確実に押さえて教えるとか、2年生ではこういうこと、3年生ではもう卒業していくわけですし大人に近づいてるわけなので、こういうことをきっちり食事と絡めて教えてあげるといって時間を確実に全体にとれるというふうないうふうにごく思っています。

ですから、ぜひそれはお願いしたいことなんですけれども、何か来年度になると英語は入ってくるわ道徳は入ってくるわ、何か先生方がみんな忙しいという頭にまずなっちゃうんじゃないかなというのをとても心配してます。ですから、忙しいなという思いじゃなくて、ちょっとその辺解決する方法はないものかなと思うんですけど、時間的には難しいかもわかりませんが、先生方が全員政令指定都市、市の職員になりましたし、市としても独自で少しは考えて何かを工夫ができないものかなというのをちょっとお願いかたがた、ぜひよろしくお願ひしたいなというふうに思います。

福田市長 お二人から食育の話出ましたけども、川崎市の食育推進計画というふうなのがありまして、それを取りまとめているのが、その会の座長をやっているのは私でございますので、これは市全体、教育、学校も含めてなんですけど、それこそ民間企業や地域団体だとか、あらゆる人たちが食育に携わっていく。学校のいわゆる授業なのか、あるいは学校のいろんな活動を通じて食育というものをある意味練り込んでいくというふうな形で、あらゆる場面に食育というふうなのが登場してくるということがとても大事なかなというふうにごく思っています。

そうですね、何を言おうとしたのかな。また後で気がついたら、思い出したらお話しします。

どうぞ。

中村委員 今市長がおっしゃったあらゆる人が食育にかかわっていくというのは、本当に大事なことだなと思います。きょう私は、午前中に鷺沼の寺子屋に行ってきたんですけども、その小学校では企業との連携で、事務機の会社だったんですけども、事務機の会社の方が鉛筆削り器を子供たちにつくらせてくださったんですね。それをつくる前に鉛筆削り器の歴史とか鉛筆はいつから生まれたかとか、そういうこととかも全部話してくださいまして、子供たちにつくったものを持って帰らせてくださったんです。その中で企業の方がおっしゃっていたんですけども、こういうことは初めてだったらいいんですけどね、させていただいたことによって社員にとっても教育ってどういうものなんだということを考える機会になったとか、社員教育にもなってチームワークも培うことができたし、自分たちにもできることがあることに気づいたとかね。企業の側にとってもすごくいいことがありますので、教育というどうしても学校とか保護者の方とか周りのほんの近くの地域の方だけだと思ひやすいんですけども、本当にあらゆる方、企業、自分は教育とは直接かかわっていないと思ひている方にも教育にかかわっていただくということが、次期学習指導要領にも書かれている「社会に開かれた教育課程の実現」というところにごく大事なのかなと思ひました。

福田市長 ありがとうございます。

先ほど吉崎教育長職務代理者も家庭との接続というか、濱谷委員もおっしゃったと思うんですけど、子供たちだけではなくて、中学校給食というふうなのはその一つのゲートにというか入り口として、それが家庭にまでつながっていく、それが健康づくりだとか生徒の体づくりというふうなのをいろんな人

たちがかわっていくということが中村委員もおっしゃったように大切なことかなというふうに思いますので、これはぜひ教育委員会も一緒に食育に全市的に取り組んでまいりたいというふうに私も思っております。ぜひ学校のほうでも御協力のほどをお願いしたいと思っております。

小原委員 私も給食の話は、これは前にもお話したとおり、保護者がPTAとしてお願いをしてきたことであり、これは大変にありがたく思っております。先ほど「学校以外のところでも」というところなんですけども、もう随分経ってるんですけど、PTA自体で食育推進コンテストというものを考えてやってまして、それは地元の企業さんとか給食会の人たちとか、あとスポーツ協会とか、当然教育委員会もそうなんですけども、そういう人たちの御協力を得て1年に1回お弁当のコンテストを行っているというのを、これも随分長く続けてきています。その中にコンテストだけでは保護者に投げかけられない部分もあるであろうということで小さい講演を入れて、食育についての講演を入れていくと。そんなに大きな取り組みではないにしても、今では中学校から何作品も応募してもらったり高校から応募してもらったりという形で、少しずつ大きく育ってきてるかなというのが一つあります。

先ほどそれ以外で寺子屋ですけども、昨年寺子屋の中で、専門学校、蒲田に専門学校があるんですけども、専門学校の先生に朝食の作り方というのを親子で学ぶ機会を一度つくっていただきまして、そういうふうにして朝食べる御飯はどれぐらいの量が必要なんだとか、そういうのを親子で知る機会というのを少しこれから継続的にやっていくというのも一つの手段かなとは思っています。

食育に関しては、最終的にはどれだけ家庭に食育の大切さとかというのを伝えることができるかというところが重要なんですけども、まずは、何というんでしょうね、保護者でもそれが大切さがわかってる人たちがどれだけ広げていってくれるかというのも少し期待をしていきたいなというふうに考えてます。

あと、児童支援コーディネーターですけども、私のところでもやはり子供だけではなく保護者にとってもものすごく話しやすいとか、そういう機会があるということで、すごくいい形になってきていると思います。

全体的なこれからの課題ということですけども、私は特に小学校なんですけども、先生たちの環境をどういうふうに変えていってあげられるのかというのはこれから考えなければいけないかなというふうに思っています。英語も入ってくる、道徳も教科になる、さまざまなものの中で学校の小学校の先生は特に担任制みたいな形になってますので、一つの教室の中で子供たちを見ていかなければいけないと。ただ、そこですごく負担がかかっていることはないだろうかとか、そういうところを考えてあげなければいけないのかなというふうに、これからはそういう課題が出てくるかなと。場合によっては一つのクラスをより多くの目で見る機会をどうにかしてつくってあげられないかなとか、そういうところもこれから考えていきたい部分ではあるというところですよ。以上です。

福田市長 ありがとうございます。

よろしいでしょうか。

前田委員 私は重なる部分もありますけど、まずはキャリア在り方生き方教育が全校実施になったということが、私も区担当時代にこの副読本を読ませていただいたりして内容について興味を持っておりましたので、大変これが全校で実施されて、先ほどの報告でもそういうものが自尊感情の向上につながっているのではないかと報告がありました。また、道徳の教科化について、いじめ防止も含

めてキャリア教育の視点からの資料づくりがなされてるようですので、川崎のこういう取り組みが道徳の教科化の資料選びにもつながってるのかなって、そんなことを感じています。

それから、2つ目は寺子屋の件なんですけど、学校と社会教育との協働という意味で、27年度が17カ所、28年度が30カ所と確実に広がっていて、学ぶ意欲と人とかかわる力、こういうものの育成にぜひつなげていってほしいなど。社会教育との協働という意味でも期待しています。

特に、誰でしたか、幼稚園で教わったことができる人が立派なリーダーだと言った方がおられましたが、挨拶ができるとか、呼ばれたら返事をはいとするとか、うそを言わないとか、それから人の嫌がることをしない、言わない、幼稚園で教わっているんだけどそういうことができない人が多いというようなことを聞いて、まさに寺子屋の事業で人とかかわる力、そういう点に視点を設けて進めていただけたらなと思っています。

それから、最後3つ目、きめ細やかな指導と学び研究推進校の指定による研究の推進なんですけど、これについてはちょっと期待したいんですが、スライド11、13の先ほどの発表の中で、小学校と中学校の習熟度の研究を推進した実施校のグラフなんですけれども、そろそろ、何年かたってると思っていますので、やはりきめ細やかな指導が子供たちの先ほどの調査だけではなくて、どのような取り組みをされてどのような効果があってという、そういう検証をされてるとは思うんですが、やはり目に見える視覚化で示していただけると、じゃあどういう取り組みがあってどういう効果が、小学校、中学校できめ細やかな指導、習熟度に応じたそれぞれいろいろな実践、恐らく川崎では行われてると思っていますので、そういうものというのはやはり先ほど話題になった授業力向上にもつながると思っていますので、ぜひ習熟の程度に応じたきめ細やかな指導の取り組みの検証をさらに進めていただけたらなと思います。以上です。

福田市長 ありがとうございます。

教育長、よろしく申し上げます。

渡邊教育長 それぞれ委員さんから事業についてお話をいただきました。私は事業を推進する立場でもございますので、今お話しいただいて評価されたものについては大変ありがたく思っておりますし、これをますます充実させていきたい、そんな感じでお話を伺いました。

また、幾つも課題を頂戴いたしましたけれども、おっしゃるとおりだろうと思っておりますし、具体的にどのように取り組めるのか、今後検討していかなければいけないというふうに思っております。

それから、総合教育会議そのものについてですけれども、27年度から新しい制度のもとでスタートしたわけですが、きょうもネットで中継されているのでしょうか。大勢の皆さんに市長と教育委員会とか、こうやって意見交換できるということは大変貴重な場だなというふうに思っております。政策につきましても、市長のほうからお示しなされた中学校給食ですとか寺子屋の事業とかですね、投げかけはいただきましたけれども、推進する側として、その価値というものを共有しながら取り組んでいるところが大変いいというふうに思っておりますし、教育委員会自体がその価値を十分高めながら取り組んでいかなければいけない、そんな思いで今進めているところでございます。

また、児童支援コーディネーターにつきましても、御就任されてからすぐに学校の現場をごらんいただいて、これはやはり今の小学校には必要だというふうな御理解いただいて、おかげさまで29年度は全校専任化というところまで参りました。このような形で市長と教育委員会とが教育施策、あるいは教育課題を共有しながら取り組めるということは大変すばらしいと思っておりますし、今回が今

年度は最後でございますけども、また引き続き総合教育会議を私どもも大変大事にさせていただいて、貴重な意見交換させていただければ大変ありがたいと思っております。以上でございます。

福田市長 どうぞ。

吉崎教育長職務代理者 きょうも先ほどスライドと申しますか、パワーポイントのところも出てましたけど、22のところなんです、自尊心の低い子が合わせますと大体2割、5分の1ぐらいいるんですね。かなり学力も問題がある。よく言われる貧困という150万でしたか120万でしたかね、家庭の年収が。それも大体5分の1から6分の1と今いると言われてます。日本の貧困率が、結構高いんですね、比率として。こういう問題は、やっぱり学校教育だけではなくて福祉の問題とのつながりだと思っております。その一環として寺子屋とかいろんなことを、給食の問題もその流れの中でも議論されることなんです、先ほど学校教育、社会教育のつながりとして寺子屋を考えてるように、そういう非常に環境的に恵まれない子とか、自己意識を持ってない子供たちというのが5分の1とか何かいる子供たちに対して、教育委員会としてはどういう視点でかかわっていったらいいのかなと常々私は考えてるんですが、なかなかいい案がなくてね、いろんな政策はとられてるんですが、具体的そういう非常に恵まれない状況の子供たちに対しては今後本市としてはどう考えたらいいのかなと考えてた点なんです。

福田市長 それでは、私のほうから。この貧困の問題というふうなのは私どもとしても調査を行っております、その結果、速報値という形で出てきております。そういったことを含めてちょっと深刻だなというふうに思っていて、例えばこれまでも生活保護受給世帯の子供たちに対する学習支援というふうなことはいろんな方々の御協力をいただいてやってきたということがございます。今後なんです、貧困のところの、調べていきますと、ひとり親家庭のところというのは貧困になっているという現状というのが、ボリューム相関が非常に大きいと。そういったところに学校教育だけではない形で寄り添っていくという、ただそういった意味でのひとり親家庭の子供さんたちに対する学習支援と、その親御さんに対する就職だとか総合的な支援の形というようなのは、これは何というんでしょうか、今吉崎先生言われたような福祉というか、若干、いろんな要素が絡み合ってくるところだと思います。ですから、学校とももちろんこれは協力、連動してやっていきますが、一部局だとかということだけでは決して済まない問題だというふうに認識しております、それは横断的に取り組んでまいりたいというふうに思っています。それが本当に自尊意識だとか、あるいは将来への夢がとかというふうな話が授業態度だとか、あるいは学習の意欲だとかというものにつながってきて、負のサイクルに入っていくということが決してないような形に全庁的に取り組んでまいりたいというふうには考えています。

よろしいでしょうか、皆様。

ありがとうございます。きょうも大変貴重な御意見をいただいたというふうに思います。私としても、ことはキャリア在り方生き方教育の全校実施と、それから児童支援コーディネーターが来年度からは全ての学校で専任化されるというふうなことになりまして、非常に意義深い年になったというふうに思いますし、また本日いただいた貴重な御意見というのをしっかり教育委員会と、そして私たち市長部局、今のお話のように市長部局ともしっかり連動しながら取り組んでまいりたいというふ

うに思っておりますので、また教育委員会の皆様にもよろしくお願ひしたいというふうに思っています。

それでは、議事はこれで終わりますが、最後に何かございますでしょうか。よろしいですか。

それでは、司会を事務局お願ひします。

北都市政策部長 ありがとうございます。

それでは、これもちまして平成28年度第3回川崎市総合教育会議を閉会させていただきます。

16時52分閉会